



# アメリカ文学「名作」の書かれなかった謎を抉る

竹内康浩『謎とき「ハックルベリー・フィンの冒険」』

ある未解決殺人事件の深層

阿部公彦 (東京大学准教授)

マーク・トウエインの『ハックルベリー・フィンの冒険』と言えば、最初の「純正アメリカ文学」ともされる小説。ミシシッピ川流域を舞台に主人公のハックが逃亡奴隷のジムとともに冒険を繰り広げる物語は、アメリカ人にとって心の原風景となってきた。これを読まないアメリカ人は、きつとモグリ。日本でもよく知られた作品だ。

さて、本書はその「謎」を解いてくれるという。

「えー。でも肝心の本を読んないわあ」とか「子供の頃に呼んだから、筋、忘れたあ」というつぶやきも聞こえるが、大丈夫。実は本書で焦点があたるのは、『ハックルベリー・フィンの冒険』に書かれた「謎」ではないのだ。大事なのは、むしろそこに書かれなかったこと。著者の腕前が發揮されるのはここだ。彼は『ハックルベリー・フィンの冒険』という小説をいったんばらばらにした上で、ほとんどトウエインの筆を奪わなければならぬ勢いで一から組み立て直してみせるのである。すると、そこに見えてくるのはほんとうは推理小説として構想されたはずのもう一つの作品……。

手がかりとなるのは、小説細部の「おや？」と思わせる部分である。それほど目をこらさなくても、ちよつと角度を変えてみると気になる部分があればこれ目につく。死体の服は？ 足跡は？ 十字形は何？ と疑問が積み重なる。こうして一通りの「謎」を収集した竹内氏はじわじわと「答え」ににじりよる。ところが、そこで雲行きが変

わる。ふと気づくと闇は晴れるどころか、かえって深まっているのだ。しかも、前よりも深く異様な闇。小説のほころびと思えたものがもつと変なものに通じていた。こうして竹内氏の追求の目は、小説の背後に隠れたマーク・トウエインという書き手の正体へと向けられるのである。彼は何かを隠そうとしていたらしい。でも、なぜ？

本書の後半、謎解きは一気に視界を広げ、トウエインの幼少体験や家族関係、残された草稿の書きつけ、他作品との重なり、さらには精神分析の知見——何かを隠そうとすると必ずそれは追いかけてくる——そして精神分析の創始者フロイトとのかかわりなど、ありとあらゆる証拠が次々に積みあげられる。そうした手がかりをつなげて一筋のストーリーを構築していく竹内氏の手際は見事という他ない。

冒頭の数頁だけでもめくってもらえばわかるのだが、著者の語りには天賦の才が備わり、あまりにうまいので「ひよつとするとこれはフィクションか？」と思ってしまう。運動神経抜群の文章とはこのことで、断崖絶壁を駆けめぐって驚異の生還を果たし、爽快にリボビタンDを飲み干すあのコマーションを、はるかにリアルで、知的で、深みのあるものにした心地良い躍動感が楽しめる文章になっている。

なるほど、文学の研究とはこのようにもありうるのだ。でも、それ以前にこれは、読者に開かれた文学の世界への誘いなのである。

明治時代の「家庭小説」から現代に至る家族小説を総ざらいした斎藤美奈子さんはこう書きます。「家族は常に対立の場であり、トラブルの源であり続けた」。関係が近いがゆえに支えにも苦痛にもなり得る家族。「山極寿一さん」と考える 家族ってなんだ？ という特集には、たくさんさんの含蓄ある言葉が集積しました。

「親に対する恨みはないけれども、人生は壊れたかもしれない。こんなロマンチック好きな人間になっちゃったのもそのせいかもしれない」(檀ふみ 女優)

「独身でいる原因を考えた時、親の火宅を結びつけると納得しやすいので、自分の中では母のせいだということにしていますね」(酒井順子 エッセイスト)

「セクハラ、パワハラ、マタハラ……。他者への発言や行動が本人の意図には関係なく、相手を傷つけたることを、ハラスメントと呼ぶ。私はここに、母と娘の抑圧問題を総称する言葉として、『母ハラ』を加えたい」(阿古真理 生活史研究家)

「母は私が24歳の時に亡くなりました。64歳でした。積み木を崩すような目立った反抗期もなかった(ように自認する)私が、子

供の頃から母にお願いしていたことはたまたひとつ、『お父さんより先に死なないで』でした」(ジェーン・スー コラムニスト)

ひとつに「家族」といってもその形態は様々。「主夫であることの幸せ」を綴ったのは作家の佐川光晴さんです。

「私にとって最大の誤算は、妻が料理に無頓着だったことで、結婚から一年が過ぎた

## 家族は荷物か喜びか

### 「考える人」編集部

頃には、私はエプロンをして台所に立つようになつてた」

五人もの里子を育てあげた菊池京子さんがさりと語る言葉は胸に響きます。

「自分が生きた証を社会に残したいから里親をやっている」と言った人がいて驚きました。私たちはただみんな『我が子』と思つて育ててきました。だって、そこに

生命があるなら世話する人がいなきゃならないでしょう」

世間の無知や偏見、無理解に怒ったり呆れたりしながらも、子育てする同性愛カッブルがいます。

「制度としての結婚という社会的後押しがないぶん、自分たちの力だけでつながっていかねければならない」(小野春さん)

晴れの日ばかりでないからこそ、家族との暮らしは生きることの深淵を見せてくれるのかもしれない。

「ある日そこに生まれ、ずっと一緒に生活してきた人たちから私は、そばに人が居てくれるときの安心感と、それに必ずつきまとう限界から生まれた孤独感の両方をもらいました」(長島有里枝 写真家)

「家族が増えて幸せが増えていく。それを夫と一緒に楽しむことができるのは何てすばらしい。そう思うと同時に、いつか終わりが来るとわかっていて、そのとき後悔しないよう、いまを大切にしたいと思うのです。とはいえ、きつと後悔しないということはないし、それを知るのが人生なのでしょう」(ジョンソン祥子 エッセイスト)

▼「考える人」一五年冬号は発売中。